

黙ったまま、露は障子を開け、廊下へ出た。

春雪はやみ、月が出ていた。

月光は、雪景色を真珠色に輝かせ、庭に沿った廊下のずつと向うまでを明るませていた。

廊下を速ぎかる露の白足袋が、外の雪と同じように真白に浮き上がり、ひたひたとひそやかな音を立てながら、遠ざかって行った。

身体は冷え切っているのに、頭の中は炎が燃えていのように熱かった。

心臓が苦しい程、音を立てていた。

納戸の横の使っていない部屋に布団を敷き、その中に横たわったとき、露の押さえこんでいた

感情がいつきに火を吹いた。

「石女…醜女…」

信次の声が、言葉が、その文字が、支離滅裂に露の中をかけずりまわった。

これまで知らない言葉ではなかった。

子の生めない女、石女。容貌のみにくい女、醜女。

それにしても、何というきたならしい字面だろう。何という哀しい呼び名だろう。これほどまでに侮辱に満ちた言葉で夫から呼ばれねばならない女。それがなぜ自分なのだろうか。

確かに、子供はまだ生まれえない。みめ美しい女だとも思っていない。自分が石女であり、醜女

であることは事実かも知れない。

けれども、夫の口からそれを言われる日があるろうとは、夢にも思わなかった。

人間には、相手の恥部をそつと包みかくしてやれるだけのやさしさというものが、備わっていたはずではなかったか。

まして、夫婦の契りをかわした男と女の間で、お互いの恥部を無残にえぐり出すなど、あるべきことではない、と露は思っていた。

たとえ、夫婦の間であっても、絶対に口にしてはならない言葉があるはずであった。

露の身体を唐突に襲い、自在に踏みつけながら、恐しい言葉を吐き続けた男は自分の夫なので

あった。

悲しみが怒りに変わり、そして底知れない絶望の闇へと沈んでいった。

全身に浴びせられた泥水が、どろどろとこびりついていような感覚が、露を包みこんでいた。

露は布団をはねのけた。部屋を出て、納戸の向かい側の湯殿へはいった。

夕方沸かしたまま誰もはいらなかった湯舟の湯はまだほのぬくかった。

露は着物を脱ぎ、湯舟に身体を沈めた。

湯の中にも寒かった。だが風邪を引くことなど露は少しも考えなかった。

湯に沈んだまま、全身を手拭いでくまなく洗い

はじめた露は、まるでものに憑かれたように、その手を休めようとはしなかった。

今しがた、浴びせられた屈辱と侮辱の汚れはどれ程くり返して洗おうと、洗い切れるものではなかった。

湯殿の窓からさしこむ月光が、そんな露を無心に照らしていた。

青白い露の顔に月光が隈をつくり、宙を見すえたまま、身体を洗い続ける露の全身からは、鬼気に似たものが漂い出ているようであった。

しかし、露は知らなかったのだ。

信次が、わが子を持つことへの執念を断ち切れないもう一人の自分と、いかに凄絶なたたかい

をくり返していたかを…。

その執念ゆえに、次第にいびつになつていく自分をどれほどもてあましていたかを…。

とはいえ、荒くれた言動で妻を征服することによつてしか、もう一人の自分をなだめるすべのなかつた信次の苦しみを、今の露にわからせようとするのはやはり、無理な話であった。

顔を洗うとき、すくつた水に透けるてのひらが、いつになく青白く見えたら、秋ももう相当深まっている。

晴れ上がった大気の中に木犀が香りをふりまき、背山の雑木が、はにかんだ少女の頬のような

かつた。

砂漠に行くような乾き切つた日々を過している露と同じように、信次のあけくれも、またかさついで、しかも、重苦しいものであるはずであった。

(母がいてくれたら……)

露は毎日、心の中で慟哭した。
今の露には、苦しみをぶちまける相手も、席をけたてて帰る実家もないのだ。

ガリガリと摩擦音をたてているような自分たち夫婦の現実には、ひたすら目をつぶり、露は、じつと耐えて日を送つた。

その露の胸の中に塗りつけられた汚辱のまっ

黒なしみが、少し色あせ始めたのは、秋色が濃くなり、鎮守の祭も終わった十月のおわり頃であつた。

このところ、信次の表情がいつになく柔いでいることに露は気づいていた。

何ゆえかはわからなかつた。思いめぐらして見ても心当りがなかつた。

急に寒さが訪れた日曜日の朝、かまどの前にしゃがんで火を焚いている露に、井戸端で顔を洗い、土間へはいって来た信次が声をかけた。

「お前、まだ足袋をはいていないのか？」

「え？」

露は一瞬、何のことを言われているのかわからなかつた。

「もう足袋をはいておらんと、風邪をひくぞ。」

露の顔を見ず、ひとり言のように言い捨てること、信次はそのまま座敷の方へ姿を消してしまつた。

露は啞然としていた。

信次の言葉ではないようであつた。今のひとは、ほんとに信次が言つたのだろうか。

「風邪をひくぞ」などと信次からいたわられた記憶は、たぐつてみても思い出せない程遠くにかすんでしまつていた。

食卓につき、前に坐つた信次に、熱い汁椀や、飯茶碗を渡しながら、露は、あるとまどいを覚え

ていた。しかし、冷えた身体に、味噌汁や炊きた

てのごはんのぬくもりがじんわりとしみこんでくる頃、そのとまどいもゆつくりと溶けていくようであつた。

「小豆島の寒霞溪、もう紅葉が身頃じやそうな。

新聞にのつとつたな」

菌切れのいい音を立てて白菜の漬物をかみながら信次はそう言い、露の顔をちらと見た。

その眼にふと走つた後めたさに似た色に、露は全く気がついていなかつた。

「そうですか…」

ほほえみを返しながら露は、信次の湯呑に茶を注いだ。

露はふしぎな気持ちを感じて味わつていた。

長い間、ぎちぎちと身体中を締めつけていた枷がゆるみ始め、身体の節々に凝りかたまつたしこりが徐々に、徐々にほぐれていくような感覚であつた。

「ああ、うまかつた…」

茶をすすり終えた信次が、あぐらを組み直し、煙草に火をつけた。

ふーつと長く煙を吐き出すと、黙つたまま露の頭越しに、後のガラス戸に透ける外の風景をみやっている。

「今日も天気がよさそうじゃ。」

どこかで鴉がひと声高く鳴いた。天に突き抜け

るようなきりりとひびき渡る声である。

「さあ、洗濯、洗濯…」

露は、自分の声が、鴟のように高く明るくひびくのを感じた。

井戸端にしやがんで、たらいの中の洗濯物をすすぐ。さんさんと降る日光と青空がたらいの中に揺れる。白い洗濯物をぎゅつと絞り、ばんばんと広げ、青竹の干竿に通す。高い空に向かって両手を伸ばし、露は次々にすぎ物を干し並べていく。

日ざしは透明で、大気はあくまでも澄んでいた。その日ざしや大気は、露の胸の中をさわやかに通り抜けて行ったが、なぜか、おりおりに淡い墨色の影がよぎり去るのを、露は意識していた。

させているのかも知れなかった。

「夕空晴れて秋風吹き……月影落ちて鈴虫鳴く

…」

露は小声で口ずさんでみた。歌を歌うなど、絶えて久しくなかったことであった。

(以上2月24日放送分)

信次が、なぜ、こんなに柔い姿を見せるようになったのか。

春雪の夜の凄絶な自分たちを思い返すと、その影が急に色濃くなるのだった。

露は首を振って思うまい、とした。

(無理やり思い起こし、掘り返すことはやめよう) 一日でもいい、信次とおだやかな日が送れるのならば、と、露は心に決めた。

信次から逃れても、どこへ行くあてとてない露なのであった。何ごとにも納得できなければおさまらないはずの露が、ひたすら自分を押しさえこみ、ただ平安のみを今は願っているのだ。ここ一年足らずの間に露を襲った孤独感への恐怖が、そう